

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

12の対話 — 「現代」を問う

テーマ ④ 「未来」はもう古い？



第4回 「未来」はもう古い？

吉岡 洋（進行 安藤泰彦）

安藤 引き続き第4回の講座を始めます。最初にプレ講座の記録映像を御覧下さい。



<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?t=1077>

プレ講座 (2023.3.12) 記録映像 — 第4回「未来」はもう古い？

吉岡 第4回は「未来はもう古い」というトピックです。二人で相談している時にこれをぼくが提案したら室井さんは、未来が「まだ古くなかった」時代のことを話しました。1980年代ですね。ぼくは彼と同じ大学院の研究室に所属していて、頻繁に会ってはいろんなことについて議論していた時代です。その頃の未来のイメージというのは、今とはだいぶ異なっていましたね。ぼくたちはパソコン通信とかやっていたけども、インターネットはまだ誰も知りません。そういう時代に未来を考える時、サイエンスフィクションが非常に想像力を刺激する状況があったんですね。これは僕らだけではなく、世界中の多くの哲学者や思想家が、とりわけ北米の英語圏の哲学者がそうでした。サイエンスフィクションを参考にして、それによって仮想的な思考実験をすることによって、哲学的な問題を考えるということです。僕たちもそうした試みに深く魅了されました。

といっても別に、SFファンというわけではないのです。考えるための材料として刺激的だったということです。それは20世紀の初めからそうで、たぶん1980年代のサイバーパンクぐらいまではそうだったのではないかという気がする。でも今はそういう状況ではない。今、サイエンスフィクションが同じような意味で面白いかというと、そんなことはない。いや、SFとして優れた作品は今もあるんだろうけれど、ぼくみたいなファン以外の人間が未来について考える時、想像力を根底から揺動かすような物語は生まれていません。

現代の僕らはむしろ、SFよりも現実のテクノロジーの進展に対して、より大きな脅威を感じますね。SFが現実のテクノロジーに乗っ取られてしまって、その結果、未来のイメージそのものがもう古くなってると感じる感じが、すごくするんです。それが未来が古くなったということです。

キューブリックの「2001年宇宙の旅」は高校生の時に見て圧倒されたけど、2001年ですからね。もう22年も前じゃないですか。未来が「もう古い」ということは、そういうふうに僕たちが若い頃想像力をかき立てられた未来の時点がもはや過去になっているという、文字通りの意味もあるんですね。

1993年に室井さんと共著で『情報と生命』という本を書いたんです。これを書くときにすごく影響を受けたのが、プレ講座の記録映像の中で室井さんが言っていた、ダグラス・ホフスタッターの『ゲーデル・エッシャー・バッハ』とか、ダニエル・デネットらが書いた『マインズ・アイ』といった著作ですね。ゲーデルというのは数学者ですが、彼が1931年に提示した「不完全性定理」は——正確に説明するのは難しいのですが——矛盾を含まない数的体系が証明も反証もできな

い命題を必然的に含む、つまり「不完全」であることを示した定理で、「無矛盾で完全なシステムは存在しない」ことを示唆するものとして解釈され、哲学や思想にも大きな影響を与えました。「マインズ・アイ」というのは「心の眼」ということで、心の中にもまるで眼のような器官があつて外界から来た情報を見ているという比喻ですが、同時に「マインド・イズ・アイ」、つまり「心とは眼である」あるいは「心とは私である」というふうにも聞こえるタイトルですね。

いずれの著作もSF的な設定を使って思考実験をして、心とは何か、意識とは何か、人間が世界を認識するとはどういうことかといった、哲学の根本問題を考えてみる試みです。しかもそれを論文という形式ではなく、読者を迷わせたり途方に暮れたりさせる、パラドックスを楽しむといった趣向の本です。近代の哲学は著者がひたすら自説を語る、モノローグという形式が主流ですが、それ以前の哲学、たとえばプラトンの哲学はダイアローグ、対話を通して語られます。デネットらの著作はある意味で、むしろそうした遊びの精神に満ちた昔の哲学書に近い試みだと思えます。

たとえばどんなお話があるかというですね、現代の私たちはふつう、自分という意識は脳の活動の結果だと思っている。つまり「私」は脳の中にいると想像しているでしょう。それではその脳を左右二つに分けて、両者を繋いでいる脳梁の神経繊維を人工的なケーブルに置き換え、脳を半分ずつ別々の部屋に置いたとしたら、「私」は二つの部屋に同時に存在していることになるのでしょうか？ さらにこの仮定を極端にまで推し進めれば、ある人の脳を形作っている脳細胞を宇宙の何億という星の一つずつ置いて、それらをすべて無線通信で連絡させれば（通信に要する時間の遅れという問題はありますがそこはSFらしく無視して）、「私」は宇宙全体に広がっていることになるのではないかと問いかけることができます。こんな荒唐無稽な設定をするのは、脳の活動としての「私」が空間的にある場所に存在するという常識的理解が、根本的な矛盾を含んでいることを実感させるためなのです。

こうした試みに刺激を受けて、僕たちは『情報と生命』という本を書きました。これが書かれた1990年代初頭くらいまでは、SFの語る未来世界が、人間とは何か？ 宇宙に人間が存在する意味は何か？ といった哲学的な問題を考えるための、大きなヒントになっていたと思えます。それに比べて現代はどうだろうか。ぼくが「未来はもう古い」と言うのは、人間や社会について、現在のそれとは根本的に異なった可能性を示唆してくれるようなセンス・オブ・ワンダー、驚異の念に満ちた未来像が、もはや不可能になっているのではないかと思うからです。「未来」という言葉からすれば、それは未だ来たらざるもの、未知の何かが到来することのはずなのですが、現代の私たちが想像する未来はせいぜい既知の世界の発展、現在のたんなる時間的延長にすぎなくなっているのではないかと。本来の意味での「未来」は、もはや存在しないのではないかと。「未来がない」というと絶望的な感じですが、そういう問いかけをしてみたいのです。

「未来はもう古い」という言い方には、かつて想像されていた未来の時点が本当にもはや過去になっているという文字通りの意味もあります。たとえば僕の世代が子供の頃「未来」の象徴であった『鉄腕アトム』の世界は21世紀ですが、アトム自身が作られたのは2003年4月7日で、もう20年も前のことなのです。『2001年宇宙の旅』に登場するスーパーコンピュータのHAL9000が製造されたのは1992年1月12日で30年以上前、彼が人間に対し反乱を起こす出来事も22年前です。

SFとはそもそも何だったのかということも、考える必要がありますね。科学技術を利用したファンタジーをすべてSFだと考える人がいるかもしれませんが。極端なことを言えば、『竹取物語』だつてかぐや姫を迎えに月から地球に来るのだからSFではないかと。でもそれは違います（笑）。

SFというのは、科学技術によって可能になる経験が、人類の運命にとって何か重大な意味

を持つと考える物語のことです。たとえば19世紀後半にジュール・ヴェルヌの『月世界旅行』つという物語がとても流行しました。日本にも明治16年に黒岩涙香訳で入ってきました。アメリカの南北戦争後に大砲の技術者たちが集まって、大砲を使って月に行くということを考えるのです。いわば兵器の平和利用ですね。当時の世界情勢を背景に読むと面白い物語なのですが、これが今言ったような厳密な意味でSFかどうかは微妙です。砲弾に乗って月に行くのは、人類の運命を左右する科学的達成というよりも、紳士たちの遊びみたいなものだからです。

もう少し後の、「タイムマシン」という言葉の元になったH.G.ウェルズの小説『タイムマシン』はSFですが、ここにも過渡期のような側面があります。たしかに、主人公の発明家が自作のタイムマシンに乗って訪れる遠い未来（8万年後!）で目撃するのは、資本主義が行き着く姿であり人類の運命そのものです。その意味では掛け値なしのSFの古典なのですが、この発明家自身は現代の科学者像ではありません。軍や大学の研究所で白衣を着て働いている科学者ではなく、自宅の地下室で怪しげな研究に勤しむマッド・サイエンティストです。これは厳密には「科学者」ではなく、むしろ「科学研究に没頭する紳士」と呼ぶべきであり、自然哲学者、錬金術師などに結びつく系譜に属する人物です。

考えてみるとSFと呼ばれる物語の大半は、何らかの仕方でタイムマシン、タイムトラベルに関わるものですね。しかし時代が新しくなるにつれて、時間移動によって可能になる経験が人類の運命に深く関わるという視点は希薄化していくように思えます。そもそも「物語」というのは単線的な時間的推移を前提していますが、そこにタイムトラベルという要素を導入すると、単線的な時間の進行そのものが混乱し、いわゆるタイム・パラドックスが発生します。昔のSFは、このパラドックスをどのようにして解決するかという理屈を考えるのに苦労していましたが、それも背景に人類の歴史的宿命というものがあつたからだだと思います。

タイム・パラドックスというのは、過去に旅行した人がその世界に干渉してしまうので、それ以降別な歴史が進行してしまうということです。それを防止するために、タイムマシンが実現された未来においては、時間旅行者が無闇に歴史を変えないように、「時間警察」によるタイムパトロールが行われたりします。まるで、アマチュア登山家が山を荒らさないように取り締まる警備隊みたいな感じですね。筒井康隆原作でテレビドラマや映画でヒットした『時をかける少女』では、絶滅した薬草を採取するために未来から少年が訪れるのですが、過去の歴史を変化させた痕跡を残さないために、テレパシーのような能力を用いて自分と関わった人々の記憶を消してまわるといふ、ずいぶん手間のかかることをしています。時間旅行も大変ですね。

一方現代のSFは、タイム・パラドックスの処理には比較的無関心だと思います。それどころか現代では、別にSFというジャンルばかりでなく、いわゆる純文学でもタイムトラベル的な設定はいくらでも利用するし、読者もそれを奇妙とは思いません。死者が現れたり、未来の自分と出会ったりしても、なぜそんなことが起こったかという説明はあまり必要ない。時間旅行という設定に多くの読者が慣れてしまったのですかね。タイムトラベルで経験する出来事も、人類の運命に関わるというよりは個人的な物語であることが多いように思います。ネットの経験が想像力にも影響を与えていることは明らかです。過去を変えて複数の歴史が生じてもそれほど気にしないというか、パラレルワールドとか異世界転生が普通になっている。

面白いけど、現代的な人生観のある種のしんどさも、これに関係しています。だって想像力のレベルでは異世界転生して幾らでも人生やり直せるけど、現実の人生はそうじゃないからね。想像世界と現実とのこの齟齬はきつと思いますね。現実に向き合いたくなくなるでしょう。

夏休みということもあるので、今回の「〈未来〉はもう古い」というテーマでは、テキストを用意する代わりに、〈未来〉がまだ古くなかった時代のSF映画やドラマをいくつかリストアップし

てきました。ここにはいろんな世代の方々が集まっているので、これらを懐かしいと感じる人や、はじめて知ったという人もいるかもしれませんが、残りの時間を使ってそうした作品について語りながら、かつて思い描かれていた〈未来〉をみんなで共有したいと考えます。作品はネット上で全編公開されていたり、少なくとも部分的な映像が配信されていますので、興味を持った方は後でご自分でゆっくりご覧になることもできると思います。

①『禁断の惑星』(Fred M. Wilcox, *Forbidden Planet*, 1956)

ぼくが生まれた年に公開された作品なのですが、とても有名で、その後のSFに登場するいろんなキャラクターの原型があります。たとえばこのロボット。いかにもロボットですよ。金属の塊です。歩き方もぎこちないし、アナログな感じですよ。頭の中で部品が回転してたり、火花が飛びだりするのですが、これが「未来」のイメージでしたね、子供の頃。そしてこんな姿なのに、とても賢いのです。現代の人工知能なんて比較にならない。そして感情も持っているように見える。SFドラマの『宇宙家族ロビンソン』に出てくるフライデーもよく似ているし、手塚治虫の『火の鳥』未来編に出てくる、猿田博士の助手のロボットもこんな感じですね。

この物語の設定は、未来において人類が宇宙を探索して発見した惑星に、はるか昔に滅亡した異星人の文明の痕跡があるというものです。彼らの科学は人類のそれを遥かに凌駕するもので、惑星全体を莫大なエネルギー発生装置に変えてしまうぐらいのとてもない発達を遂げていたんだけど、なぜか滅亡してしまった。異星人たちは滅びたけれども、地下の巨大な機械システムは動き続けているのです。そこに目に見えない怪物が現れる。この怪物はどんな武器で攻撃しても平気で、どうも物質で出来ていないみたいなんですよ。それは、実は人間の心の奥底に潜む破壊衝動が、異星人が残した巨大装置が供給するエネルギーによって実体化したものだということが最後に分かる。

面白いのはそれが「イドの怪物」と呼ばれていることです。「イド (ID)」というのはドイツ語の「エス (ES)」に相当するラテン語の代名詞で、「それ (英語だと “It”)」という意味です。フロイトの精神分析理論においてこの言葉は、人間の心の中にありながら、私＝自我が自分の一部だと認めることのできない、強力な心的エネルギーの源泉というような意味があります。認めることができないから抑えつける、つまり「抑圧する」しかないわけですが、抑圧されても消えることはなく、形を変えて戻ってきます。イドは自我よりも遥かに強いですからね。

その星の住人たちも、科学的理性は人類より遥かに進んでいたのですが、このイドのエネルギーはコントロールすることができず、それによって滅びてしまったことが暗示されています。理屈としてはよく出来ていますね。もちろんSFなので精神分析も科学技術も都合のいいように解釈されてるんですが、注目すべきなのは、フロイトの精神分析がこんな人気映画の物語の背景として使われていたことです。今では想像できないかもしれませんが、20世紀の前半、1970年代くらいまでは世界の多くの地域で、精神分析はとてもポピュラーでした。心理療法として広がっていただけではなく、日常会話の話題となり、ハリウッド映画のようなポピュラー文化にも入り込んでいたのです。

たとえばマリリン・モンローが出てくる『7年目の浮気』のような映画の背景にも、通俗化された精神分析が出てきます。地下鉄の通気口から出る風でスカートがめくれ上がる、あの有名な場面がある映画ですね。これも1955年で同じ頃です。結婚7年目の冴えない男が、アパートの上の階に住むセクシーな美女と浮気することを妄想するというコメディです。そんなことにわざ

わざ精神分析なんて必要ないと思うのですが(笑)、それくらい知られていたということですね。

それはともかく、フロイトの精神分析それ自体が人類の〈未来〉に対する強い関心に導かれていたことは確かです。昔のSFが想像した〈未来〉が古くなったことは、精神分析が過去のものと考えられている今の状況とパラレルだと思います。

②「生まれて来なかった男」(*The Man who was never Born*, 1963 テレビの連続ドラマ『アウターリミッツ *The Outer Limits*』のエピソード。)

これは映画ではなくテレビドラマですが、YouTubeで全編が公開されています。この物語については最近、ライターのだいまりこさんが運営しているYouTubeのチャンネル「未来に残したい授業」で話しました。この動画チャンネルで昨年「失敗原論」という連載で話をしているのですが、その第8回「時間は存在しない!？」です。この物語は、昔の典型的なタイム・パラドックスを扱ったものです。

1960年代の宇宙飛行士が宇宙空間の時空の歪みに巻き込まれて、200年後の未来にタイムスリップする。地球に着陸するとなんと人類文明は滅びかかっており、生き残りであるミュータント化した人間と出会って話を聞くと、人類滅亡の原因はある生物学者が宇宙から採取した細菌をばらまいたことによると分かる。それで、二人で200年前の過去に戻ってそれを阻止しようということになる。それでもう一度1960年代の地球に戻ってみると、ちょうどその生物学者を産むことになる両親がまだ若い婚約者だった時代なんです。それで、その二人が結婚しなければ生物学者は生まれなわけだから、あなた達が結婚すると生まれた子供が人類を滅亡させることになるからやめなさい、と忠告するんですね。そんなこと言われて、誰がハイそうですかって言うこと聞くか(笑)。あまりに無策というか、未来人のくせにアホかと思うんですけど。

まあそれはいいとして、その婚約者の女性がなぜかその未来人が好きになっちゃうんですよ。でももう結婚は決まっているから仕方なく元の婚約者と式をあげるんですが、未来人はその結婚式に乱入して花嫁をさらっていく。なんかどっかで観たような場面ですが、ダスティン・ホフマンの『卒業』はこのドラマの後(1967年)です。花嫁の方も未来人に惚れてるからついて行き、そうして二人でロケットに乗る。花嫁を連れ去ったのだから、生物学者となる子供も生まれず、200年後の未来は滅亡を免れているはずなので、その世界で二人で幸せに暮らそうと思ったのです。

ところが、再び未来へとタイムスリップするところで未来人の男は消えてしまうのです。それは過去に介入したために、人類滅亡の原因は確かに除去できたけど、それによってその他の歴史の進行にもいろんな影響が出てしまったのです。その結果、未来人自身も生まれなような歴史を作ってしまった、というわけです。ぼくは子供の時にこれを観て、不思議で仕方がなく、何度も考えてみた。その未来人の男が生まれなかつたのなら、過去にタイムトラベルして人類滅亡を阻止する人もいなかつたのだから、結局歴史は元通りになっているのではないか?

高校生になって哲学書を読むようになり、ニーチェの『悲劇の誕生』を読んでいた時に、この物語のことを思い出しました。プリュギアのみダース王が、何でも知っている森の半獣神シーレーノスを捕まえて、人間にとって最も善いことは何か? という人生の秘密を問いただすのです。するとシーレーノスは、なんでお前ら人間は知らなくていいことを知りたがるのか、と最初は教えてくれないのだけど、強いて訊ねるとそれは「生まれてこなかつた」ことだ、と答えるのです。王のような境遇の人ですら、生まれてこなかつた方が幸せだと。でももう生まれてしまつてるから、次善の策は今すぐ死ぬことだと答える。

この話はニーチェが、西洋近代文化の起源としての明朗で理性的な古代ギリシアという当時の通俗的イメージに対して、古代ギリシア人は実はとんでもないペシミストであることを示す例として語ったのですが、ぼくはこれを読んだ時、SFドラマの「生まれてこなかった男」を思い出したと共に、太宰治の「生まれてすみません」を連想しました。余談ですがこの「生まれてすみません」というフレーズは本当は太宰治が考えたのではなく、箱根駅伝のランナーでもあった寺内寿太郎という詩人が作ったもので、太宰にパクられてしまったのです。太宰に悪気はなかったらしいのだが、太宰のファンでもあった寺内はこのことがもとでおかしくなり、失踪してしまうのです。

③『2001年宇宙の旅』(Stanley Kubrick, *2001: A Space Odyssey*, 1968)

これはとても有名なので知っている人が多いでしょう。そしてこの作品は、先ほどSFがSFである条件として述べた、人類の運命への関心ということから考えても、そのテーマを真正面から扱うものです。それはまた、人類文明はどこから来たのかということへの関心でもあります。昔も今も論じられていることですが、地球上で生命がたまたま誕生するという出来事は、起こる確率が低すぎるので、最初の生命となる物質は宇宙から来たという考え方がありますね。生命誕生の謎を説明する一つの仮説ですけど、その物質は宇宙のどこでどのようにして誕生したかは分からないので、もちろんこれでは謎を解決したことにはなりません。

『2001年宇宙の旅』では、生命誕生ばかりでなく人類に文明が可能となる知性を獲得したのも、宇宙からの何らかの介入によるという仮説が背景となっています。これは監督のスタンリー・キューブリックが、脚本を担当したSF作家のアーサー・クラークと共に、クラークのいくつかの作品に基づいて創作した物語で、後に小説化されました。宇宙船を制御するHAL9000というコンピュータが登場し、落ち着いた声で人間と会話するのですが、意識や感情を持っているかのように振る舞い、結果的には人間に反逆します。これについては来月、人工知能や「シンギュラリティ」についてお話しする時にも取り上げたいと思います。

この映画は中学生の時に観て、ものすごい衝撃を受けました。当時は映画は映画館かテレビ放映でしか観られない時代だったので、映像版は繰り返し観ることはできなかったのですが、その後小説は本当に繰り返し読みましたね。しかしいくら読んでも謎は解けない。なので、この続編が出た時には貪るように読みました。アーサー・クラークは人類の運命をどう描くのかという関心からです。1980年代に『2010年』と『2061年』が出ました。それからしばらくして1997年に『3001年 終局への旅』という最終編が出たんです。

しかしこの『3001年』にははっきり言って失望しました。あんまり話題にならなかったのを読んだ人は少ないと思いますが、今回の言い方をすれば「未来が古くなった」と思ったんです。どういふ話か簡単に言うと、2001年にHAL9000によって宇宙に投げ出された飛行士の一人が仮死状態で千年後に回収され生き返るんです。それで、1000年後の文明はどうなってるんだろうとワクワクしながら読んだのですが、衛星軌道まで達する超高層ビルが建ってたり、脳と接続して仮想現実が体験できる情報端末があったり、ペタバイト(1024テラバイト)の容量を持つタブレットがあったりして、確かにすごいと言えばすごいんですが、SF的なセンスからしたら、え? 1000年も経ってその程度? と思ってしまいました。

つまり、少しも未知の世界ではないのです。ビルも情報機器も、すでにあるものが量的に高性能化しただけで、少しも驚くべきものではない。ようするに未来は現在の延長上にあるだけで、

本質的には全然〈未来〉ではない、と感じた。これは、作家がもう歳をとって想像力が減退した、ネタがなくなったというだけのことではないと思いました。1990年代後半になると、もはや未来が〈未来〉ではなくなったということだと思います。今回の講座の「〈未来〉はもう古い」というテーマは、この『3001年』を読んだ時の感覚が元になっているように思います。

④『少年と犬』(L.Q. Jones, *A Boy and his Dog*, 1975 原作は Harlan Ellison)

これは、観た人はあんまりいないかもしれない。でもYouTubeでは全編観ることができるし、これもその後のいろんなSF的設定に使われる元ネタになっています。今まで紹介した作品と違うのは、描かれるのがユートピアではなくディストピアとしての未来であるということです。理想社会ではなく、終末・滅亡としての未来ですね。その意味ではたしかに先ほどの「生まれてこなかった男」における未来もディストピアですけど、それは物語の中心として描かれることはありませんでした。それに対してこの『少年と犬』では、ディストピア的な未来そのものが舞台です。

核戦争後の世界という設定で、冒頭に原爆のキノコ雲が描かれます。『仁義なき戦い』(1973年)の冒頭と同じですが、核戦争後に国家も法律も無効になって、地上が「仁義なき戦い」の世界になるという設定は、その後もいろんなディストピアSFに利用されます。「お前はもう死んでいる」という決め台詞が有名になった1980年代の人気テレビアニメ『北斗の拳』の世界もそうですね。

『少年と犬』の原作を書いたのはハーラン・エリソンというアメリカの有名な小説家で放送作家でもあった人です。2000年代のはじめに片山恭一の『世界の中心で、愛を叫ぶ』という恋愛小説がヒットしてドラマや映画にもなって「セカチュー」という言葉が流行りましたが、このタイトルの元ネタがテレビアニメ版『新世紀エヴァンゲリオン』最終話のサブタイトル「世界の中心でアイを叫んだだけの」で、さらにその元ネタがエリソンの代表作のひとつ『世界の中心で愛を叫んだだけの』(*The Beast that Shouted Love at the Heart of the World*, 1969) なんです。

この『少年と犬』の世界では、地上は荒くれた男たちによる、食べ物や女性をめぐる容赦ない奪い合いの世界なのですが、地下はある意味豊かで、食べ物にも女性にも困ってないんです。でも少数の指導者によって独裁的に支配されていて、歯向かうものは殺される。まあ、共産主義国家のパロディですね。H.G. ウェルズの『タイムマシン』が描き出した未来世界の、別バージョンとも言えるでしょう。物語全体のメッセージとしては、地下世界で従属を受け入れながら豊かな生活を送ることよりも、地上で明日の命も知れない境遇に身を置きつつ、自由を選択することが善しとされています。

⑤『ブレードランナー』(Ridley Scott, *Blade Runner*, 1982. Philip K. Dick, *Do Androids Dream of Electric Sheep?* 「アンドロイドは電気羊の夢を見るか」を下敷きにしている。)

サイバーパンクぐらいまではSF的想像力が生きていたという話を最初にしましたが、これはそのサイバーパンクSF映画のカルトみたいな作品ですね。原作はフィリップ・ディックっていう作家が書いた『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』っていう、読んでももうひとつよくわからない作品ですね。それをリドリー・スコットっていう監督が映画化した。『エイリアン』を撮った人ですよ。ディックには悪いけど、映画の方がずっと面白いです。

ここに登場するレプリカント、つまり人間に似せたサイボーグ的存在は、『禁断の惑星』に出てきた金属製のロボットとは似ても似つかない。金属部品から出来ているのではなく、バイオテクノロジーの発達の結果生み出された人造人間です。見かけは人間とまったく変わりませんが、知能も運動能力も人間以上である反面、寿命が短く、人間が従事できない過酷な労働に、奴隷のように使役されるのです。だから反乱を起こす。

この映画を見たのは大学院時代ですが、面白かったのはまず未来がある種古びた感じだったこと。1970年代くらいまでの支配的な未来イメージは、大阪万博でもそうですが、すべてが新しく、白っぽくてツルツルでした。未来人は理性的で、感情が抑制されていて、身体も頭でっかちで筋肉が少なく、着ている服もつなぎ目のない滑らかなテクスチャーでした。でも『ブレードランナー』の未来はロサンゼルス風のチャイナタウンで、異文化混淆的で汚くて、過去と現在の未来の要素が混在している世界でした。現実社会でも進行していたグローバル化とシンクロしていました。それが「未来」イメージとして説得力を持っていたのですね。「サイバーパンク」と呼ばれた文化です。この映画は、大学院時代に室井さんと二人で観に行ったのを憶えていますね。

これも、〈未来〉が古くなったという現在の状況を指し示す例の一つなのですが、同時に室井さんと『情報と生命』を書くときにもかなりの影響を与えました。この本は共著ということになっているけど、短いフィクションと哲学的なエッセイが交互になっていて、今だから言えるネタバレみたいですが、フィクションはほとんど僕が書きました。実はこの「哲学とアートのための12の対話」も、記録してそれをもとに書籍化する予定になっています。『情報と生命』から30年の時を隔てた続編みたいな感じですね。室井尚さんとの共著という形で、この講座が終わった後出版する予定です。

で、その中に講座で話した内容や、室井さんが書き残したテキストも使って構成するつもりなのですが、人類の未来を語る哲学的SFみたいなフィクションも計画しているのですよね。それを今書いているのですが、なかなか難しい。できないかもしれない。それは〈未来〉がもう古くなってしまったからです。だから今回のテーマは、今自分が書き手として悩んでいる問題でもあるのです。でも諦めてはいなくて、こうしてお話をしながら、皆さんの質問やコメントからヒントを得ようと思っているわけです。

参加者との対話

発言者A 生成系AI、ChatGPTが出てきたタイミングで、SF作家たちが団結して『AIとSF』っていうアンソロジーを、今年5月の時点で出版しています。でも私も、今日の講座で出てきた映画とか小説で「未来」とされた年代がもう過去になっているという話で、ドラえもんは22世紀だからまだ未来なんですけど、〈未来〉がもう古いと言われるとそれは何でかなとか、未来が想像できなくなってるみたいに言われると、本当にそうなんだろうかって考えるんです。

でもそのアンソロジーを出しているSF作家自身も、書いている実感としてどんどん追い越されていく感みたいなことをすごく言っていて。リアルなことを書けば書くほど、もう2年後には古くなっちゃってるみたいな状況を、受け入れて書くかどうか、みたいなことを言ってる人もいて。だからもっと曖昧化したり抽象化するっていう人もいたり、でも逆にそうじゃなくて、今は書けるものを具体的に、追い越されてもいいから何か書いていくみたいな。そういうのを読んでみると、新しいもの、びっくりするようなものを想像することが、よっぽど難しくなってるっていうことなのかなとか思いつつ、吉岡先生が93年に書かれた時から30年を経て、もう一回SFを書く試みをされてるっていうのは、ちょっと今期待しています。

吉岡 「SF」という言葉がプレッシャーなのかもしれないけどね。30年前も、SFを書いているという自覚はそれほどなかったんです。いや、自分にはあったかもしれないけど、結果的にそうは読まれなかったということもある。『情報と生命』を書いた時に一番面白かつびっくりしたことの一つは「脳内コンピュータ」というエピソードで、「中国語の部屋」に関する話を書いたんですよ。

「中国語の部屋」っていうのは、ジョン・サールが1980年に提唱した思考実験で、機械的存在が言語を「理解する」とは何を意味しているのか、ということを考えさせる問題です。部屋の中に中国語を全く理解できない人がいて、窓から中国語の質問が書かれた紙が入ってくる。それを、辞書や文法書を使って解読し、返事を作成して窓から渡す。すると部屋の外にいる人にとっては、その部屋には中国語を理解している誰かがいるように見えるということですね。これは、コンピュータが言語処理をすることによってそれが言語を理解しているように見える、ということについてのアナロジーで、哲学的な人工知能批判に使われます。

ぼくはそれが気に入らなかったの、次のような話を書いた。自分が脳手術をしなければならなくなって、その時に友人の脳外科医からちょっと実験台になってくれないかと頼まれて、中国語の辞書と文法規則が焼き込まれているバイオチップを、僕の脳の言語中枢と連動するように埋め込むんです。しばらくしてから、ぼくは中国の学会に出席するために飛行機に乗って、隣の席の中国人に話しかけられたら、中国語を勉強していないのにすらすら答えられる。

つまり、サールの思考実験は「部屋」という比喻だから人工知能批判として使えたけど、その「部屋」が頭蓋、つまり脳そのものだったらどうなんだ、っていう話ね。で、そういうのを書いたらゼミの学生が「先生、いつそんな手術されたんですか？」って言って、これがほんとにショックだった。何がショックかって言うと、その子はぼくの書いた話がSFだと思ってなかったんですよ。その子がアホかと言いたいんじゃないってね、そんなことですら信じられてしまうような雰囲気、つまりSFよりも実際の科学技術の方が驚きだという状況が、もう1990年代半ばにはあったということです。

とはいえその頃はまだ、そういう話を書いて騙された学生がいた、とネタにして授業で言ったりできた、つまりそんなことあるワケないじゃない、と考える人も多かったんですけど、それも難し

くなくなったのではないかな、今は。

発言者A うん、なるほどそうですね。未来を想像する、未来を語るっていうことが……SFっていう言葉がプレッシャーになるとさっき仰ってましたけど、SFの語る未来だけが未来じゃないと考えると、何か他に、もっと自由な想像力とか、SFという枠組に縛られずに語るっていうこともありそうですね。

吉岡 SFというのはやっぱり20世紀特有のものだと思うんです。ではそれ以前の人々の未来イメージって何だったかっていうと、科学技術じゃなくてむしろ社会改革です。マルクス主義とかまさにそうですね。さらにそれ以前の、18世紀啓蒙主義の時代の思想家たちが考えた未来も、科学的イノベーションが中心じゃないんですよ。科学もあるけどね、一番大事なのは人類の道徳的向上なんです。それが中心に来なきゃいけないのが当たり前だった。19世紀になるとそれが政治経済的な改革に置き換わって、20世紀になるとテクノロジーに置き換わるんです。その時に出てくるのがSFです。

それがもう、今終わりにかけているということだと思う。技術イノベーションによる未来の到来という想像力が、もう賞味期限切れかかっているんですよ。だからSFは未来を思い描かせてくれない。ではどうなるのか。ある意味、それ以前のものにちょっと近くなるんじゃないかなと思う。つまり科学技術ではなく、哲学、道徳、政治といったものの改革によって、社会が根本的に変わっていくことを想像しないと、もう新鮮味がないというか、そういう感じがしますね。

発言者A 有難うございます。何か納得します。

発言者B 吉岡先生が先にオチを言っちゃったんですけども、実は先ほど言われた「脳内コンピュータ」っていう『情報と生命』に書かれているエッセイですね、その話を実は去年と今年、私の大学の授業でしてるんです。そしたら全く同じように、うちの学生たちも「えっ、そんなこともうできるようになったんですか?」ってコメントして(笑)。それが今の時代だからそう思うのかなと思ったら、30年前の大学でも同じ反応が起きてたっていうのを聞いて、すごく面白いと思いました。

それでちょっと質問なんですけど、ダニエル・デネットの『マインズ・アイ』とかホフスタッターの『ゲーデル・エッシャー・バッハ』とかいう本が1980年代、90年代当時はかなり読まれて議論されていたんですね。でも今はそれらの本も絶版になってたりして、今生成系AIとかが話題になっても、あんまり「チューリングテスト」とか、さっきの「中国語の部屋」とか、人工知能について考えるための基本的な問題がそこまで真剣に議論されてないような気もしています。哲学者たちによる、還元主義の強烈な批判というのものなんか響いてないですよ、還元主義者の方に。どうしてこうずっとすれ違ってるのかなって、考えているんですけど。

吉岡 その問題は、次回に中心的に扱うつもりなんです。ひとつには、1980年代に議論されていた人工知能と、ChatGPTのような現在の人工知能とは、同じ「人工知能」という名前では呼ばれているけれども、まったく違うものだということがあります。

1980年代くらいまでの人工知能開発は、最終目標としては、本当に意識や感情を持つマシンを作ろうというのがあったんですよ。鉄腕アトムとか、『2001年』に出てくるHAL9000みたいなものです。もちろん技術的に遠い目標ではあったのだけど、目標ではあったわけね。システムが

極度に複雑化してある閾値を超えれば、そこに到達できるんじゃないかみたいな想像力があつた。それに対して現在の人工知能というのは、そんなこと全く関係ないんですよ。機械自体が意識や感情を持つかどうかなんて、そもそも興味がない。人間から見て、意識や感情を持っているかのように振る舞えばいいのです。チューリングテストの考え方が徹底化されたということですね。

昔の哲学者たちはいわば、人工知能とか言ってるけどそんなの効果だけで中身空っぽじゃないかって批判していたわけ。ところが現在の人工知能開発は、空っぽで結構、空っぽでもビッグデータを高速に扱えれば、人間と区別のつかない応答ができるんだから、機械が意識や感情を持つかどうかなんてどうでもいいし、機械の中で何が起きているかなんて関係ない。いや、実際に機械の中で本当は何が起きているか、専門家にも分からないんです。

だから哲学的な人工知能論には別なアプローチが必要なのではないかなと思っています。「何ができるか」で人間と機械の間に境界線を引くのはもう無効だと思う。機械は何でもできると考えた方がスッキリします。翻訳もできるし、作文もできるし、アート作品も作れる。第3回の質疑応答で話題になっていた、アートがいかに役に立つかを行政に認めさせる申請書の作文なんて、ChatGPTはいちばん得意ですよ。だから、みんなそれ使って提出すればいい。それくらい有能になってきているんですね。学校とか、生成系AIは脅威だから使用を制限すべきだというような防衛に回ってるけど、そんなことしても絶対無理だと思う。新しいテクノロジーが出てきた時に、それを禁止してうまくいったためしはないんですからね。仮に規則で禁止しても、機械でもできることを特別に保護してやらせてあげている、という状況では、人間は自分のやることに誇りを持ってません。先住民の保護区みたいなものです。

だから人工知能にできることはいずれ全部人工知能がやることになると思いますよ。それはそれでいいんだけど、その時に僕が思い出すのは1970年代。僕が中学生の時に、もうすぐコンピューター社会が到来して「コンピュートピア」、つまりコンピューターによるユートピア社会が実現されると言われた。するとどうなるかということ、人間が今までやってきた単純な知的作業を全部代行してくれるから、人間は一日の労働時間が3時間とかになって、あとは好きなようにスポーツをしたり芸術を楽しんだりできるようになるって大人たちが言ってたから、すごいな、いい時代に生まれたなって思ったんですよ。ところが、実際は何が起きました？ めちゃくちゃ忙しくなったじゃないですか。コンピューターが高性能化して社会に導入され、インターネットが普及して、つい最近ではコロナによってオンライン会議が普通になって、ますます仕事が増えた。

テクノロジーが発達するほど、人間は忙しくなる。これと同じことが、現在の生成系AIに関しても起こりそうなのが嫌なんです。人工知能が嫌なんじゃない。たぶん、哲学者の中ではぼくは一番人工知能が好きだと思うよ。でもそれによってますますやらなくてもいい仕事、ブルシットジョブが増えて、人間が奴隷化されてゆくの嫌なだけなんです。だから、人工知能の導入に反対するんじゃなくて、みんな「もう騙されないぞ」と連帯することのほうが大事だと思います。

発言者C 私は70歳なんですけど、コンピューターは0101で、みんな01（ゼロイチ）に変換してでます。データも通信もそうなんです。そこで、「01」が「10（イチゼロ）」に置き換わったらどんな世界になるのか。ちょっと面白い。全然今までと違った発想ですね。こんなのどうでしょう。1010、いわゆるオンオフオンオフの世界なんです、コンピューターというのは。コンピュータ言語はそうなんですけど、それがあ規則正しい状態に変換されていきます。で、その変換された状態がある外的要因で変わってしまうということなんです。こういうことが起こった時に、哲学者は何を考えるかっていうことです。

吉岡 哲学者が何を考えるかは分からないんですけど、今の仮定はSF的にはちょっと使えるかもしれません。何らかの要因によって論理のオンとオフがいきなり逆転する世界…逆転しても同じような気もするんですけども…。たしかに情報技術の最先端よりも、そのロジックの原理的な部分は常に面白いです。たとえばコンピューターの発達はかなり初期にですね、ソビエト連邦の数学者で、オンオフの2値ではなく3値の論理で動くコンピューターを構想していた人がいるんですよ。「01」じゃなくて「012」なんです。電子計算機の開発では結局アメリカが勝利して、3値のコンピュータは実現されなかったんですけど、そういうところから考え直すのはまだ可能性があるような気もする。さっきSFは終わったみたいな話をしたけど、テクノロジーの原理的なレベルでは終わってないかもしれないとも思いました。

発言者D これまでの脈絡から逸れてしまうかもしれないんですけど、先ほど来話題になっている『情報と生命』という本の最後の方に「死について」というチャプターがありますよね。私はサイエンスフィクションとかあんまり詳しくないんですけど、お話を聞きながら星新一が1960年に書いた「生活維持省」というショートショートを思い出したんです。それは、未来社会で人々が平和に何不自由なく過ごしているんですが、それはなぜかという、マザーコンピューターみたいなのがランダムに抽出した人物を射殺することになっていて、それを遂行する生活維持省という官庁が人間を間引きすることによって人口が調節され、人々に均等な空間と平和がもたらされるというプロットなんです。要するに未来では死は人間によって管理されているというか。

もちろん戦争とか、それに類する紛争とかもそれに近いものかもしれないんですが、システムティックに死を管理するっていう想像力が、SFであるとか、未来社会に対する想像力の中にはある。それは現に医療の問題とか、科学の問題として、死をコントロールしたいという人間の欲望はどうも推し進められている状況なんじゃないかと、私なんかは考えているんですね。

で、この本の中で最後の方に、例えば「これまでの宗教のようなものが、その十全に死を語りつくすか語ることができなくなった中で、科学の中でむしろ死の問題がアクチュアリーを持ってきたことは皮肉なことではなくて、大きな希望だと考えておきたい。人類は今、やっとのことで過剰な恐怖もファナティックな狂信もなしに冷静に死を直視しうる年頃に差し掛かっているかもしれないからである」という風に書かれています。しかし現実には、あんまり冷静に死を直視していないというか、相変わらず死を技術によって覆い隠し、そこからひたすら目をそらそうとしているように思えてならないんですね。ちょっと質問としてまとめきれないんですけども、この本が書かれてから、これだけ時間が経った中で、相変わらず状況は人間の死に対する想像力とか死を取り巻く言葉、言説というのは、あんまりいい方向に進んでいるようには、私には思えない。吉岡先生はそれについてどう思われますか？

吉岡 たいへん鋭い指摘をありがとうございます。そうですね。その本を書いた30年前を今から振り返ると、その時代はまだ科学技術的な思考が一般読者の中に浸透していないので、それを喚起することで伝統的な死生観を再考するように促したかった。だからさっき読んでもらったような箇所というのは、かなり読者を煽ってますね。わざと論争を引き起こそうとしている。だけでもその後30年経って何が起こったかっていうと、今おっしゃったように、死の問題についても科学技術が宗教に置き換わってしまったんですよ。ある意味ではそこに書いた通りになったんですが、だからといって「冷静に死を直視する」成熟した時代になったわけではない。反対に、技術が死を覆い隠すことになって、別な種類の恐怖や狂信が生まれている。

科学技術による死の管理っていうのが本当に進行している。でも、そうした状況について考

える私たちの思考は少しも科学的になってはいない。多くの人は科学技術をまるで宗教のように信仰しているのだから、基本的には何も変わっていないとも言える。相変わらず我々が死について考える時の想像力の枠組みは古いままです。室井さんも、さつき映像の中で「新しいと言われてるけど何にも新しくない」と言ってたけども、そういう状況があるんですよね。

だから死を語る言葉を本当に刷新することは、依然としてとても重要だと思います。死を管理する未来社会について、星新一は独特のシニカルな物語の中でそれを語ったわけだけども、ある意味、この物語で描かれているような死の管理は、現在実際になされていることです。「生活維持省」の役人がある日突然射殺しに来たりはしないけどね（笑）。そして選択はランダムじゃなく、誰が死ぬべきかということが、結果としては政治的に選ばれている。日本だけじゃなくて、全世界的にそうした事態が進行しています。

だから死を語る言葉も哲学的な思考のレパトリーに入れておく必要がある。カメルーンのアキユ・ンベンベっていう哲学者は「ネクロポリティクス（死政治）」っていう言葉を作って、権力がどのようにして誰が死ぬべきかを決定しているかを論じています。「死政治」というのはミシェル・フーコーの「バイオポリティクス（生政治）」という考え方を、さらに発展させたものと言えます。そうした概念は脱植民地主義の文脈の中で強い政治的意識と共に語られる言葉だけけれども、死をめぐる言葉の刷新というのは必ずしもそうしたことだけではありません。

たとえば最近出た『生命を問いなおす』（日本記号学会編、新曜社、2023年）という本の中で、僕は細胞生物学者の吉森保さんと対談していますが、そこで彼は死について面白いことを言っています。吉森さんは、細胞が自分自身を食べることによって自分を作り直す、「オートファジー」という現象を研究されている方です。そこで彼が言っているのは、死というのは避けられない宿命ではないということです。細胞レベルでは死は必然ではなく、何かの理由で獲得されたものだと。生命は放っておくといつまでも動き続けるが、だんだん劣化してやがて死ぬようにプログラムされている。何のためかにはよく分からない。「目的なき合目的性」ですね。

死についてこんな風に見方を変えてみるだけでも、私たちが常識的に抱いている「生きとし生けるものは必ず死ぬ」というような通俗的な死生観を揺さぶることができます。現代は科学万能の時代だと言われるけれども、ほとんどの人は科学技術の成果ばかりを期待して、科学それ自体に興味を持っていないし、科学的なものの見方や考え方をしようとしません。科学と哲学や宗教は対立しているのではなくて、相互に刺激し合うべきものです。科学的思考をぶつけなければ、哲学・宗教はいつまでも無力なままだと思っています。

安藤 ありがとうございました。最後に出た「不死」の問題とか、この講座の最終回となる第12回「不死と月見草」にもつながっていくテーマだと思います。次回8月の第5回は人工知能をめぐる話になると思いますが、ぜひご参加いただければと思います。本日は第3回と第4回の連続講座になりましたが、これで終わりにしたいと思います。次回よろしくお願ひします（拍手）。

2023年7月22日(土) 於：京都芸術センター「大広間」